

2009年立山登山ウォーク

(2009年8月29日)

ゼッケンNo. W250 山猫@滋賀

はじめに

5月はじめに「立山登山マラニック」の案内が送られて来た。昨年は申込書送付後に参加通知が届いたが、事情で参加ができなくなったのでお断りの手紙を実行委員長に送り、参加費の入金はしなかった。今年は晴れて参加できそうだったので、早急に「参加させて頂きたい」という気持ちを込めて書いたA4用紙とともに申込みをさせて貰った。ただ、昨年からマラニックの部は室堂制限時間が1時間短縮の13時(9時間)となり、「称名エイドを含めて関門に引っ掛かれば、室堂より先には行ってはならぬ」ということになったので、写真も撮らないといけないし、関門時間に追われるのは本位ではないので、ウォークの部に申し込んだ。実際問題として走力の衰えが目に見えてひどいことが一番だが・・・。

大会の1ヶ月前の7月に昨年から予定していた「劔岳」への登山を7月3連休に行くことを決め、地元のフランケンさんに案内して頂いて、babiさんと登ることにした。登山靴、ストック、ザックを購入し、いざ室堂への気合は十分だったが、7月は例年に比べて連日の雨で立山も同じく悪天候が続いた。その週に富士山で落石があり、キャンピングカーを直撃、寝ていた男性が亡くなった。また、北海道・大雪山系トムラウシ山と美瑛岳では悪天でツアー客ら計10人が遭難、死亡が確認され、夏山としては過去に例がない大規模遭難となった。そんな事故の話が耳に入ると気持ちが遠のきつつあったのも事実で、計画を断念しても1ヶ月あまりすれば、また立山に行けるという気持ちもあった。

直前までは青春18切符を使って、鈍行でひとりのんびりと富山まで行くつもりだった。途中、福井駅前にある「ヨーロッパ軒総本店」で昼食を摂り、途中で温泉に入ることも考えた。その前に、今まで行ったことのない車窓の姿を見たいとの思いがあったので、北アルプスを眺められる岐阜から高山本線経由で富山に行けないう検討したが、時間的に無理だったので、この計画は取りやめた。

直前にやまさんから青春18切符で一緒に行こうとの連絡が入ったので、2年前と同じパターンで富山に行くことにする。ところが、富山に行く3日前の火曜日の仕事中に突然の携帯メールで親父が畑を耕作中にテーラに手と足を挟まれたとの連絡が入った。会社を早退し、搬送された病院に向かう車中で入院は必至だろうから、楽しみにしていた金曜日からの立山にはもう行けない。これも運命か、仕方ないと思っていたら、親父の怪我は軽傷で、入院はおろか、かすり傷程度で済み、立山には行けることとなった。

前日

今月は300km到達が危ない状態だったので、朝7時過ぎから9km弱走ると、調子は良かった。明後日の衆議院銀選挙に行けないので期日前投票にも行ったが、平日の朝とあって、空いていた。

やまさんとの合流時間に合わすために、1本早い電車で京都まで行き、湖西線の敦賀行・新快速に乗る。山科からだ新快速に乗っても座れないので、京都から乗ることにした。今津で9分の待ち時間があったので、ここでやまさんと合流。敦賀には11時15分に着けるので、11時になると車中から「ヨーロッパ軒敦賀駅前店」に電話し、弁当2個を用意して貰うように頼む。敦賀では30分ほどの時間待ち



があるので、その間にヨーロッパ軒まで弁当を取りに行ける。出来立てのソースかつ弁当はぬくぬくで、美味しい臭いが漂っていた。

ここでH間さんと会う。立山に参加される女性と一緒にいた。こ

の女性の足の筋肉は相当なもので、力がありそうだった。11時43分の福井行きは早めにホームに入るの、ゆっくりしていると座る場所がなくなる。福井行きの車両は今までと違い、琵琶湖線と同じものになっていた。缶ビールを買い、電車が動き出すとソースかつ弁当を広げる。炊き立てのご飯



にソースかつ、美味しそう。そんな時、H間さんと一緒の女性がソースかつ弁当を見たいと言って席に来られ、何度も携帯で写真を撮られた。そういえば、いつだったか、湖西線が敦賀まで電化されていなかった頃に北陸線内でH間さんと出会い、敦賀駅で一緒に降りて、ヨーロッパ軒の店内でソースかつ丼を食べたことがあった。

やまさんとソースかつ弁当を食べると車内に臭いが充満したように思えた。ご飯は相当押さえられており、その上にソースかつが3枚置かれ、ふたは浮くほどのボリューム。缶ビールを飲みながら、半分ほど食べるとお腹いっぱい。あとの半分は無理やり押し込んだ感じだった。大食いの私でさえそんなのだから、やまさんはもっときつそうだ。

1時間弱で福井に到着。数分の乗り換え待ち時間の後、12時46分発の富山行きに乗る。ここからは従来通り、北陸線を走っていた古い車両だ。時折、特急の待ち合わせで何回か停車することもあった。金沢では熊本から早く着いて、金沢市内の散策を終えた、がつつくんが合流。3時間ほど歩いたそうで、汗まみれでの乗り込みだった。15時38分に富山に到着。天気は今夜から雨、明日午前中には上がりそうで、午後には回復するという予報だった。



3人で駅横の「地鉄ホテル」で受付。今回の参加者名簿には過去マラニック参加からウォークに変更した人はすぐにわかるようマーキングされていた。恥ずかしい気もするが、目的があるのだから、気にする必要はない。それにしてもリピーターの多い大会だと感じる。また、一の越からは「雨具持参」を義務付けると書かれていた。一の越でチェックされるのだろうか？。去年のことがあるからだろう。その後、サンダーバードで来られたもりけんさんも合流。I井さん、K村さんも受付に来られた。

今回は「ビジネスホテルオカムラ」を予約した。駅から近くて、チェックイン18時以降プランで3500円と安く、宿泊コメントでは評判が良かったからだ。荷物を置いて、夕食に出かける。I井さんとK村さんも同じホテルに泊まれる。時間的に早かったせいもあり、開店前が多かったが、前



に入ったことのある「五條」という居酒屋に入る。ソースかつ弁当を食べてから5時間ほどしか経っていないので、それほど腹は空いていなかった。生ビール、刺身やサラダなどを食べ、明日の朝食を買ってホテルに戻るが、この時、小雨が降り始めていた。

フロントにはWindowsとMacのPCが1台ずつ置いてあり、このクラスのホテルとしては相当充実して

いた。部屋に持って入れるコーヒーマシーンもあった。室内はバス以外綺麗で、格安にしては満足だった。麺が食べたかったので、室内でカップラーメンを食べる。このホテルはPCが繋げることができるので、持参のモバイルでブログの更新などネットを見る。LANがあると本当に便利だ。あとは菓子を摘みながらテレビを22時まで見てしまった。

当日朝

2時50分の目覚ましで起きると強い雨の音がし、外を見るとバケツをひっくり返したような大雨だった。弁当を電子レンジで温めて食べ、2時半にフロントに。PCで今日の天気を検索すると昨日の予報と変わっていなかった。昨夜遅くに着かれたbabiさんも交えて、強い雨の中を富山駅前に向かい、バスに乗り込む。浜黒崎キャンプ場に早く着き過ぎるとのことで途中で若干の時間調整もあった。私とやまさんはウォークなのでのんびりできるが、マラニック組は大変だと思う。

近くの「久乃家」で泊まれた吹田ヘルスの面々やこがみちゃんなどと写真撮影。大雨なので限られた場所で雨宿りする。以前は食べ物や飲み物が置いてあり、自由に飲み食いできたが、今回は何も置かれていなかった。そんな中で、「山猫さんですね。松原です」と実行委員長・松原さんの奥さんから声を掛けて頂いた。2005年にはバスに財布を落とし、その節は松原さんご夫婦には大変お世話なり、その後も聞きたいことがあれば、いつも奥さんに電話をさせて頂いていたので覚えて下さっていたのだと思う。傘を差してスタート場所に移動し、マラニック組のスタートを見送る。強い雨の中でも松明の火は赤々と燃えていた。



4時15分に立山駅行きのバスがスタートすると聞いていたが、その時間になってもバスは一向にスタートせず、結局4時半になった。車内にはスタッフとウォーク参加組とエイドに下ろす荷物なども積まれていた。雄山神社前立社壇で荷物を降ろして立山駅に向かったが、強い雨は一向に止む気配がなく、大会がどうなるのか心配になる。

5時45分頃に立山駅到着。ウォークの面々がスタートを待っていた。6時前だが、登山客が大きな荷物を担いでケーブルカーで美女平に向かおうと切符を買う列が見受けられた。山の朝は早い。雨中なので、どんな姿で臨もうか思



案する。そんな中、やまさんと同じ会社のT尻さんを紹介して貰う。仙台のA部さんや東京の雲峰さんの姿もあった。

強い雨で気温は低いし、ウォークなので上はゴアテックスを着て、ウインドブレーカーの下はデイパックに入れた。下は山歩きに適したような長目の半パン。試しに行きはずっと上っているので、ストック1本だけ手に持って進むことにした。6時を回ったがスタートの合図がない。何か変だなと思っているとスタッフから「雨で八郎坂が危険な状態にあるため、ウォークは称名エイド折返しとします。マラニックはここ立山駅をゴールとして打切ります」とアナウンスされ、ウォークのスタートは10分遅れの6時10分に変更になった。



大会道中

相変わらず強い雨は止む様子もないまま、称名エイドを目指して数十人がスタート。マラニックのスタートではそうでもなかったが、ウォークはゆっくりなので大部分の人がカップを着て重装備だ。称名川の橋を渡っている途中から走り出す。今回、ウォークで30kmほどの距離を稼げると思っていたが、思惑が外れたので、称名エイドより1kmあまり先にある称名滝まで行こうと決意し、走り始める。大会では称名滝は八郎坂からは見えるが、滝つぼを見ることができないので、今回は滝つぼを見るチャンスでもあった。

強い雨が降りしきり、山には雲が掛かっている、周りは何も見えない。緩い上りをゆっくりと走っているうちに前は2人だけしか見えなくなっていた。後ろもまばらでコース変更と雨でもう少し走っている人がいるかなあ~と思ったが、以外や以外走っている人はほとんどいないようだ。2kmほど走った後、上りが辛くなってきたので歩き出す。いつまで雨が続くのだろうか？。天気予報通り、9時になれば雨は上がるだろうか？、などと考えながら早歩きで進む。フランケンさんと枸杞さんが先回りして応援に駆け付けてくれていた。写真を1枚撮って貰う。走っているところで申し訳なかった。いつも子供達がテーブルに冷たい水を用意して待っていてくれるログハウス「クムジュン」の前に子供達の姿はなかった。ウルトラマラソンの私設エイドの場合、ここに何があるというパターンが定着するとアテにすることが気持ちの拠り所にもなるので、姿がないととても寂しく思う。

その頃、ゆっくりではあるが走り続けられている女性に抜かされた。かなり苦しそうだが、一向に歩く気配はない。「無理して走らなくても良いのに、ウォークなんだから」こんなことを思いながら、早歩きする。周りのどこを見ても雲が掛かっている、何も見えない。雨足もスタート時と変わらない。

少し雲が切れ始めて欲しいと願う気持ちは参加者全員の思いだ、称名川の流れは今までと違い、雨量も多かったせいで、清流の透明感は全くない。ストックで前に前に身体を押し出しながら、できるだけ早く歩くようにした。右の山に目をやると急カーブが連続の立山有料道路が見えるのだが、今年は雲の中のように何も見えない。ようやく立山有料道路のゲートが前方に見えてきた。『ようこそ雲上の立山へ』と書かれた大きなゲートだ。

雨がひどく、顔を洗うほどでもないが、例年通りのパターンを崩さないように左側にある商店前の山水をひと口飲んで顔を洗う。暑いと息を吹き返らせてくれる気持ち良い冷水だが、気温の低い雨模様の中ではそれほどの気持ち良さは感じない。ここで待って下さっていたフランケンさんにまた写真を撮って貰う。ストックについて歩いている姿はヨレヨレ老人みたいだ。

ここは「桂台」標高663m、大幅距離短縮のウォークだが、緊張感のない状態でスタートしているので、だだらムードになっている自分自身を強く感じる。立山駅から4kmで200m上ってきた。結構な上りだ。ここから称名エイドまではあと3km弱。30分あまり歩けば着くことができる。しかし、ここからは強烈な上り坂が待っている。一端下った後、上りに変わる。下りは走った。今回はずっと道路の右側を進む。

この辺りでは右前方に高さ300m、幅2kmにわたる一枚岩「悪城の壁」が見え始めるのだが、雲の中で全く何も見えない。真正面には大雨でないと現れない「ネハンの滝」、さらに右側には多くのソーメン滝も現れている。悪城の壁にもところどころ短めのソーメン滝が現れていた。余計に称名滝に行きたい気持ちが強まる。

道路左側の空きスペースに小学生低学年の子供さんと一緒にエイドの準備のような作業を始める人の姿があったが、この時点でエイドされるかどうかはわからなかった。その後は下りになれば時たま走る程度で進んで行く。洞門が見え、13%の上り勾配が迫ってきた。やっぱり凄い坂だ。坂ではなく、山上にさえ思える。2つ目の洞門先までこの上り勾配は続いた。

称名第2発電所が見え、屋上にはOの中にHが書かれたヘリポートのマークが見える。最初は発電所のHかなと思ったが、ヘリポートのHだったと後に知った。ヘリポートは“H”マーク、レスキューは“R”マークで、着陸せずにホバリング態勢での救助活動を行うそうである。間もなく称名滝の駐車場が見えてきたので称名エイドは近い。

そろそろ折り返してくる人の姿が現れ始めた。私の前には2、3人だと思っていたが、それよりは多かったみたいだ。ここで折り返して来る人はかなり走っているものと思われる。称名レストハウスの手前で男女2人が応援に駆け付けられている様子だった。「マラニックの方を待たれているのですか？。それなら、大雨でマラニックは立山駅ゴールに変わりました」と言う。「応援に駆け付けたのですが、そうですか。仕方ないですね」と返事された。

称名レストハウス前のエイドは例年通りの規模で設置されていたが、パスして「称名滝を見に行っても良いですか？」とスタッフに尋ねると「くれぐれも八郎坂方面には行かないように！」と念を押され、OKを貰えたので、そのまま直進する。例によって、冷たい山水を口に含み、顔を洗う。ここからも坂は続く。強い雨は降り続くが、ネハンの滝、その右のソーメン滝が近づいてきたので、タイミングを見計らって、木の枝の下で雨を少しでも避けながら、袋からカメラを出して写真を撮る。このような天気ではなかなか思うように撮れない。路面に称名滝まで1kmの表示があり、後ろからは誰も近づいて来ない中、滝に向かう。ネハンの滝が迫って来た。左に車が1台止まっていた。

そして、向こうの方から傘を差した3人組が見え、すれ違う。先ほど止まっていた車だろう。右には八郎坂の登山口に向かう分かれ道があるが、そのまま直進すると屋根が見えてきた。雨は一向に止む気配なく降り続けているので、屋根があれば写真も撮れると嬉しくなる。屋根のあるところは休憩所のような

だった。しかし、ここからもネハンの滝しか見えず、称名滝は一向に姿を現さない。目の前には大きな滝つぼがあり、手前は見学路になっていた。雨も混じって凄い水しぶきで体感温度は一気に5℃くらい下がった。この時、ゴアテックスを着ていて良かったと思う。見学路の一番右側まで寄ると称名滝がようやく見えた。が、雨と水しぶきでカメラを構えられる状態ではなかった。

音を立てて流れ落ちる姿は雄大そのものだったが、目の前で見る称名滝と八郎坂を登りながら見る称名滝とは全く違って思えた。目の前の称名滝は豪快そ



のものだが、八郎坂からは真横になるのでしなやかに見えるように感じた。凄い水しぶきなので、すぐに引き返して称名エイドに向かう。ここからは500mほどの下りになるので、できるだけ走ろうと思う。先ほどすれ違った3人組を抜かず。

称名レストハウス前に到着。エイドは簡素なものではないかと思っていたが、反して立派なものだった。パンと梨、スポーツドリンクを頂く。参加者は濡れても良いと思っているが、スタッフやボランティアの方がこの大雨の中、大変だと察する。「まだ後ろに人はいますか？」と聞くと「わずかだと思います」との返事が返ってきたので頑張ろうという気持ちになる。今回はアシックスのニューヨークを履いたが、どうも足首にゴツゴツ感があり、スムーズに足が出なかったせいか、走れるはずの下りでブレーキが掛かるようで辛くなっていた。しかし、できる限り走ろうとはしたが、13%の下りはさすがに厳しかった。

前方には次々とウォークの人が現れ、それらの人を抜かして行く。走り通せたのは2kmくらいで、急ぐ必要もないのであとは歩きと走りを変えた。行きにエイドの準備をされていた親子のエイドに寄らせて貰い、「こんな天気では仕方ないですね」と言いながら、お茶を頂く。

立山有料道路の入口に差し掛かり、左の立山有料道路の方を見上げると若干ではあるが、雲が切れ始めていた。天気予報通りなら、9時に雨が上がるのだが、そんな気が始めていた。ここからは3.9km。しかし、長く感じた。

そのうち、前に3人組の男女（男性2名、女性1名）が右側を2列になって歩く姿が目についた。車が少ないとはいえ、路肩も狭いので、2列は危険だ。その中の女性は横歩きしながら、身振り・手振りで男性2人に辺りの山の説明をし続けている。右側は車とは対向になり、時折来る車もお構いなしに身振り・手振りは続いた。話し方から関東の方面の人で、カッパで覆っているのが年格好はわからないが、年輩の人だった。横歩きするなら剣のカニのヨコバイでやってくれと思いながら、抜かして行く。

走っては歩きを繰り返し、何人ものウォーカーを抜かして行く。天気の割にはすれ違う車の数は多かった。マラニックで立山駅にゴールされたであろうランナーとすれ違った。どこまで走ろうというのか？。残り2kmくらいだろうか、そんなに急ぐ必要もないだろうから、もう歩くことにした。距離は短い、かなり疲れた。

左の美女平側の山の雲が徐々に薄くなり始め、切れようとしていた。大会が中止になってから、雨が止むのか？。左前に立山駅の形が見え、称名川に掛かる橋を渡ると間もなく立山駅だ。マラニックのランナー達はかなりゴールしているようで駅構内はごった返していた。ウォークなのでゴールテープを切るのに戸惑いがある。雄山山頂のゴールなら恥ずかしくないが、2時間あまりのウォークだと戸惑ってしまう。そして、ゴールした時、ほとんど雨は上がっていた。



アフターで剣御前へ

立山駅構内はゴールした溢れんばかりのランナーと登山・観光客でごった返していた。ずぶ濡れなので大部分の人は待合室の椅子や床に荷物を広げて、着替えたり、荷物の整理をしていた。やまさんはすでに着替えを終えられていた。私も着替えようかと思ったが、バスタオルの持ち合わせがなく、着替えようにも場所がなかった。雨は完全に上がっていたので、外もランナーで溢れている。

9時にバスが発車すると聞き、室堂で着替えることにした。早く着替えたいので、そのままの格好で荷物を持って、やまさん、T尻さんと一緒にバスに乗り込む。1時間すれば、室堂に着ける。バスはヘアピンカーブ連続の立山有料道路を上って行く。美女平駅が見えた。今までのバスは逆方向ばかりで、美女平駅を初めて見るのができた。上りは下りとは全然イメージが違う。T尻さんは「このトンネルは急カーブを過ぎると突然現れ、路肩も狭いので、走って上り下りするのは危険過ぎて絶対無理」と言われたが、

自分の目で見て、まさにその通りだと思った。

バスの中では余ったエイドに並べられる予定だったおにぎりやお菓子が回された。称名滝が見える付近ではバスは一旦止まって、説明があった。そして、間もなく弘法。ここからは視界が広がるが曇っていて、眺めは良くない。しかし、すっかり雨は上がり、雲もどんどん切れていくのがわかる。

これから先は天気良ければ、左に大日岳、奥大日岳が見え、大パノラマを楽しめるのだが・・・。実際、天気良ければバスに乗っていることはなかった。バスはエンジン音を上げながら室堂を目指しているが、バスの座席からの目線と実際に自分の足で上っている時の目線の高さが違う分、上る時の角度感まで変わり、より急坂に思える。こんなにも急な坂が延々と続いているのだから、それは苦しくて、座り込んで休みたくなるような気持ちになってしまうのは致し方ないことだと思う。

スタッフから「雷鳥荘は12時からでないといけないので、室堂付近でそれまで時間を潰して下さい」と説明を受け、着替えてないし、どうしようかと思っていたら、T尻さんが「みくりが池温泉なら風呂も開いているし、食べる場所もあるので行きましょう」と言われ、やまさんと3人でそうすることにした。

室堂には10時過ぎに到着。そのまま、みくりが池温泉に直行する。雷鳥荘に向かう尾根は何回も通っているが、今回はきつく感じた。10時半頃に到着。T尻さんの奥さんは昨年シーズン、ずっとこのみくりが池温泉で働かされていたようで、T尻さんもスタッフとは顔なじみだった。まさにT尻さんは立山や室堂のオーソリティのようだ。まず、濡れたウエアやシューズを暖房機の入った乾燥室に干し、風呂に直行。白く濁った硫黄泉に入ると冷えて疲れた身体が一気に暖まった。

冷えた身体を温泉で暖め、汗を落とし、すっきりした後は早い昼食。普通の山小屋は冷凍物を使っただけの食事だが、ここの料理はしっかりしたシェフがいて、手料理で持て成ししてくれるので非常に美味しいとのこと。確かにこの山小屋はこじんまりしていて、暖かい雰囲気がある。メニューを見て注文したのは「炙りサーモン丼」。サーモンの丼は初めてだが、炙ってあるので香ばしそうだ。まずは生ビールで乾杯。出て



きた炙りサーモン丼は見た目以上に美味しかった。薄く切ったサーモンを火で炙り、その下にタマネギとタレが敷いてある我が人生で最高の魚丼だった。ソースカツ丼とは全く違った味、香ばしいサーモンの味が最高でまた食べたい一品だ。やまさんとT尻さんはげんげの唐揚げと白海老のかき揚げの「みくり丼」。ともに980円だった。

徐々に雲も切れてきて、外を眺めていると贅沢な時間を過ごしている感じがする。この先、どうして時間を過ごすかの話になり、前に見える剣御前に登ろうということになった。外に出ると天気もかなり回復し、多くの人の姿があった。T尻さんが地獄谷の温泉卵を貰ったと持ってきてくれた。硫黄でかなり黒くなった独特の色の卵で、塩を掛けなくてもよいくらいの甘い味だった。ここから雷鳥荘まではいつもより、長く感じた。バスで一気に上ってきたせいだろうか？。雲は山



の上の方だけ、雲海の下にいるような感じ。そして、緑が綺麗だ。



雷鳥荘には12時過ぎに到着。かなりの参加者が待っていたかのように入って行く。今回はやまさん、T尻さん、もりけんさん、がつつくん、どなたかもう1名の6人部屋だった。荷物の整理をし、12時半頃から目の前に見える「劔御前小舎」を目指すことにする。劔御前小舎付近を雷鳥荘から見るとガスで被われていて、標高も雷鳥荘より300mほど高いので、寒さ凌ぎにゴアテックスだけは持参した。眼下にはその登山道がはっきりと見えていた。

12時38分、雷鳥荘から階段を下って、200m下の雷鳥沢に降りる。称名川の源流となるイカダの架かったような橋を渡り、野外キャンプ場を通り、登山口から登って行く。雷鳥荘から下を眺めてばかりだったが、一番低い雷鳥沢から上を見上げると全く違う風景になっているので山は飽きないと思う。劔御前と書かれた登山口の看板があり、ここから500mほど登らないといけない。前に進まなければならぬし、T尻さんの説明も聞かないといけないし、写真も撮らなくてはならないし、忙しい。



登山らしきものをほとんど経験していないので、山のことをT尻さんから教えてもらう良いチャンスだった。晴れ間も見えるので、片手にはストック、首にタオルを巻き、大汗をかきながら必死で登って行くが、すぐに息が切れてしまう。石がゴロゴロしているので踏ん張れない。アシックスのニューヨークは凹

凸が少ないのでグリップが効かず、不安定で足が疲れる気がする。

今は手ぶらで登っているが、本当の登山は大きなザックを背負って登らないといけないので、息遣いも大事になるだろう。ここを登られる方、降りてこられる方はみんな大きなザックを背負った本格的と思われる登山者ばかりで、目的は剣岳のようだ。一の越から雄山に向かうルートとは全く違って、マナーが全く違う。登り優先という山のルールが守られていて、気持ち良さまで伝わってくる。



止まって写真ばかり撮っているとT尻さんから「足元を見ながら100歩進んで、1回休むを繰り返すのが山登りの疲れにくいコツ」と言われたが、多くの写真を撮ろうとするとこのルールは厳しいそうだった。しかし、疲れないようにするのが第一だと思う。辺りは高原植物の宝庫だが、名前を知っているのは悲しいかな這松くらいだ。刻々と移り変わる景色、草花、どれもこれも目移りする。

淡いピンクの「チングルマ」があちこちに生息していて、気が付かなかつたらそれまでだが、気付くと可憐さを感じる。やまさんはチングルマくらいしか知らないと話されていた。また「ナナカマド」「ブルーベリー」などについても教えて貰えた。ナナカマドという名の由来は“大変燃えにくく、7度かまどに入れても燃えない”ということから付けられたそうだ。ブルーベリーは青紫色の小さな果実で、これを取って食べると美味しい。



剣御前小舎に近づくにしたがってガスが掛かり始めてきた。寒さも増す。横に急な斜面が見え、ガスが

どんどん流れていくのがわかる。もう汗も出ず、半袖ではかなり寒くなってきた。もう完全にガスの中だ。そんな時、右にいきなり石垣が見え、ついに劔御前小舎に到着。13時48分、雷鳥荘を出発してから1時間10分要した。T尻さんは荷物を背負って登れば2時間くらい掛かると言われた。



劔御前小舎は毎日の様子をHPで詳しく公開されているので、HPで見た通りのドラム缶が目についた。尾根なので風が強烈で、気温も一気に下がり、冷えたガスの中にいる状態だ。半袖、半ズボンなので、体温がどんどん下がっていく。劔沢方面はガスで全く見えない。劔山荘方面と別山方面の表示板があったので写真を撮る。わずかに見える日本三大雪渓のひとつ「劔沢雪渓」がこの下にあるようだ。



左側に小高い丘のようなところがあったので、さらに登って行くと強い風と寒さは増すばかり。這松が一面を被った先には岩が尖ったような部分があり、そこに若いカップルの姿があった。男性は普通の運動靴姿、女性は長靴のような靴を履いていて、よくぞここまで登って来たものだと思えた。



ここでやまさんと写真を撮るが、ガスがどんどん通り去って行くの



がわかる。寒さは限界だった。わずかしが登っていないが、劔御前小舎と比べると一面凄いガスだ。再び、

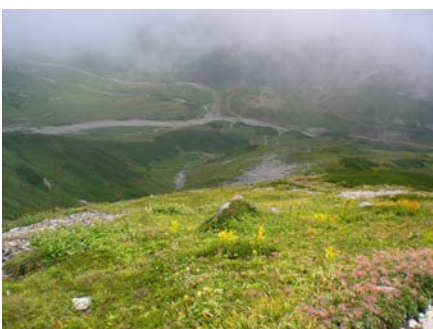
劔御前小舎前に戻ると幾分ガスが切れ始めた。劔沢小屋か、劔山荘に向かうグループの姿が点々とあり、劔沢雪渓の一部も少し見える。今年は雨が多かったせいか、雪渓が小さく思える。これから劔沢や劔山荘方面に進もうとする人、劔岳登山を終えて、これから下ろうとする人の姿が行き来する。ここであまりの寒さにゴアテックスの上を着るとだいぶ違った。



雷鳥沢に戻ろうということになり、今度は別山乗越を降りることにした。いきなり三角の尖った先のような尾根だ。尾根の先は山のように見え、どこに向かっているのだろうか、そんな感じさえする。登って来た時と同じように草木が綺麗だ。こちらのコースは足場も歩く、また這松が登山道まで延びているので進みにくかった。雷鳥沢から登るコースとは全然違ってバリエーション豊富だが、かなりきつい。チングルマがいっぱい生息していて、T尻さんは「露が付くと光って見えてもっと綺麗」と教えてくれた。



劔御前小舎で、T尻さん曰く「ここは風の通り道なので、少し下れば寒くなくなる」と聞いたが、少し下るとこんなにも違うものかと思うほどだった。雷鳥沢方面を眺めるとガスと日差しという取り合わせが見事だ。しかし、自分の足元は大小の石がゴロゴロしており、上りと違って下りはかなり気を使う。ランニングシューズでの下りはきつく、少し足が攣ってきた。右下の沢を見ると山崩れの後があり、吸い込まれるような怖ささえも感じる。



前方を見ると奥大日から雷鳥沢に向かって来る人の列が見え、雷鳥荘も地獄谷も大きく見えるようにな

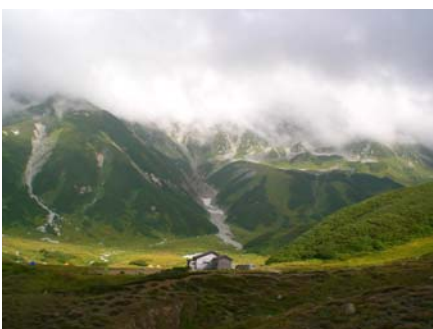


ってきた。T尻さんは冬場に雄山や剣御前までスキーを担いで登り、そこから夏場は岩でポコポコだが、6、7mの大雪で平坦になった谷を滑降すると聞き、そんなことをする人が横にいることに唖然とする。別山から雷鳥沢に滑って降りる場合は目の前のコースを進むと教えて貰う。また、T尻さんは指差しなが



ら、プロスキーヤー三浦雄一郎さんはあそこを時速200kmで下ったとも教えて貰った。ただただ、その凄さに驚嘆するだけだ。

薄緑と濃い緑のコントラストを上から眺めながら下って行くと雷鳥沢まで来られ、木道があった。弘法から弥陀ヶ原に進むところを思い出す。別山や雄山の上の方はガスが掛かっているが、その間から太陽光



が入ると光の当たった部分と当たっていない部分が独特の色合いになって、鮮やかだ。称名川を渡ると今度は急な上りの階段が続く。息が切れそうで、足が上がらない。滑らないように気を付けないと・・・。

そして、16時50分頃に雷鳥荘に戻り、今登ってきた剣御前小舎や雄山、地獄谷などを眺めて余韻に浸る。部屋に戻るともりけんさんやがつくんはその後、お塩師匠達とずっと宴会をしていたようだ。それぞれの立山アフターという気がする。温泉に浸かった後、外の風景を眺める。1時間前、山の上に掛かっていたガスも消え、あつという間に太陽はオレンジ色に変わり、薄暗くなり始める。しかし、この日の夕陽はそれほど綺麗ではなかった。剣沢の画像ではもっと綺麗だ



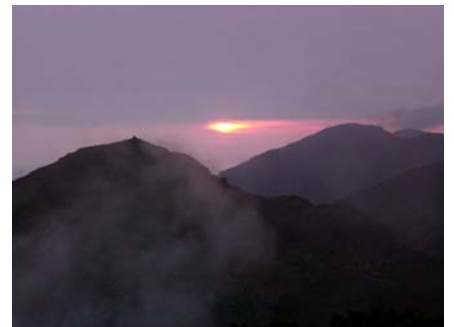
ったので、場所の違いか？。

そして、夕食。吹田ヘルスなど関西の面々と一緒のテーブルに付いた。雷鳥荘の食堂は綺麗になり、今までとはちょっと違った雰囲気か？。並んでいる料理は確かに変わっていた。前は山小屋らしいトンカツや焼き魚で量があったが、今回は刺身などに変わり、ちょっと違う雰囲気だ。運動した後なのでトンカツなどが良いように思う。700円の生ビールで乾杯し、ワイワイ言いながら食事を摂る。食べ終わった頃にモチベーションの高いお塩師匠はテーブルを移動しながら、「一生懸命頑張って走らないといけない。手を抜いてはいけない。それなりの覚悟と自覚を持って臨め！」と力説され続けられた。お塩師匠ほどの実力者の一語一句にはそれなりの説得力がある。



食事後に外に出て山に沈む夕陽を眺めるが、雲があってそれほど綺麗な光景ではなかった。しかし、山にいと別世界だ。横を見ると身振り・手振りで自分ほど山に詳しい者はいないと言わんばかりに、機関銃のように説明しまくっているおばさんがいた。おそらく、大

会中のウォークで横歩きしながら説明しまくっていた人だと直感的に思ったが、人から聞かれる前にあらゆる知識を前面に出すのはどうか。聞かれたら、少しでも自分の知識を出す程度で良いのではないかと私は思う。



雷鳥荘のフロントには映画「剣岳」のスタッフや俳優のサイン入りTシャツやポスターが貼られていたので目を通す。部屋に戻ると沖縄から参加のW田さんも交えて談笑。

懇親会の始まる8時前に食堂に行くと立つ場所もないくらいで、とてもこの場に居られる雰囲気ではなかった。元々狭いところなのでかなり窮屈だが、今年は早朝に大会が終わっていて、疲れて寝ている方がいないので余計に混んでいるようだ。つまみを握り締めて、缶ビールを買い、部屋に戻る。6人でワイワイ言いながら、部屋人だけの懇親会を始める。そして、10時過ぎに布団に入るがなかなか眠れず、何回も

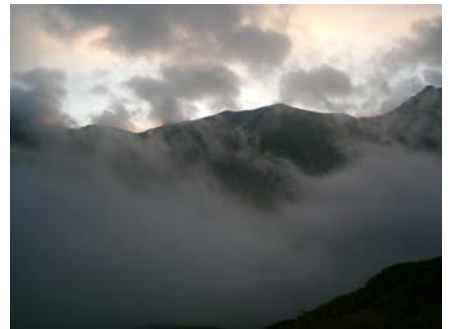


トイレに駆け込んだ。

翌朝の雷鳥荘、室堂

朝4時45分頃に目が覚め、早速温泉に浸かりに行く。冷やかな山の朝の空気を吸いながら、白濁のイオウ泉に入れるのは贅沢だと感じる。その後はいつも通り半袖シャツに半ズボンで外に出てオゾンいっぱい山の空気を吸う。少し肌寒いがとても気持ち良い。何も考えないで、しばらくポオ～としたい気分になり、ここにいると時間が止まっているように感じる。

そして、6時からバイキングの朝食を腹一杯食べて、帰り仕度する。雷鳥荘を7時過ぎに出てバスターミナルに向かうが、来る時と帰る時とではいつも違う風景、イ



メージに感じる。向かう方向が違っていると見る角度が変わるからだろう。朝は慌しく、落ち着けない間に帰路につかないといけないのはもったいないと思うが、時間の関係で仕方ない。早くにバスの座席を確保し、いつも通り土産物を探す。いつも同じような買い物ばかりだ。

室堂からの帰路

9時になるといつも通りバスが室堂を出発し、スタッフの方々が「また来年お会いしましょう」という手作りの大きな紙をひとりひとりが高く掲げて見送って下さった。昨日朝の天気は嘘のようで、例年と違ったとても有意義な時間を過ごせたと思っている。いつもなら、自分の足で通ってきた立山有料道路だが、今年は楽できた分、違っていても思えた。隣の座席には岡山から参加の40代後半の男性が座られた。ランナーは見た目より若く見える人が多いが、その人も若く見えた。キャリアはまだ浅いようだが、フルは3時間半くらいの記録をもっており、現在進行形で記録意識が高いように思えた。いろいろと話をしていると昨日の立山駅着が9時頃だったようで、相当きつかったようだ。本人曰く、これが精一杯なのでとても室堂関門通過は無理だと言っていた。来年はどうするかわからないそうだ。



富山駅には11時前に到着し、ここからは普通電車で帰る。もりけんさんも、やまさんも車に便乗させて貰って帰られるので帰りはひとり旅となる。売店で帰りの車中で食べるマス寿司を買う。そんな時、富山駅で香峰さんとばったり出くわした。金沢から夜行バスで仙台に帰られるそうで、金沢までの1時間、いろいろと世間話をした。その中で来年のさくら道が行われるのではないかという話題だった。さくら道での再会を約束して別れる。

金沢駅で待ち時間が45分ほどあるので、時間潰しに構内の土産物屋をブラブラするが、ここも年2回寄ると見慣れた光景で、しかも良い値段がするので買う気にはならない。売店で昼食用の弁当と缶ビールを買って電車に乗り込む。金沢からは福井行きがある。車窓を見ながら、缶ビールを飲んでゆっくり帰るのもまた良いものだ。福井駅ではまた45分くらいの待ち時間があった。待合室には3台ほどのテレビがあり、ちょうど北海道マラソンの実況が映っていたので、しばし見るが、何故か落ち着けない。今度は敦賀行きに乗り換えるが、敦賀は大阪方面と新快速が繋がっているため、乗客が一気に増える。この辺りで富山で買ったマス寿司を食べる、疲れている時の酢の味は喉に通りやすく感じる。湖西線の高架から琵琶湖が見えてくると帰ってきたなあ~と感じる瞬間だ。そんなこんなで家に着いたのは6時過ぎだった。



最後に

今年の室堂平は草が黄色くなり始め、例年と比べて秋の訪れが早いことを告げていた。立山のことに詳しいT尻さんからいろいろ話を伺い、山の奥の深さを十分に満喫することができた2日間だった。

大会は強い雨により、八郎坂を上る許可が富山県警から下りなかったため、早速と中止になったが、その分10時には室堂に行け、思う存分大会では味わえないアフターの山三昧だった。「みくりが池温泉」での「炙りサーモン丼」は格別の味だった。T尻さんのお陰でHPでいつも見ていた「劔御前小舎」まで登れ、いろいろな木々や花を教えて貰うこともできた。山に登ることはきつかったが、その分、今までにはなかったいろいろな立山を、室堂を知ることができたのは、皮肉にも大会が途中で中止されたお陰だった。初参加の人には申し訳ないが、何度も参加しているとこんな年があっても良いと思う。新しい思い出を作れた2009年立山は記憶に残る年となった。来年もウォークの部に申し込もうと思っている。